

現在分詞に 2 種類あるか

葛 西 清 蔵

0. 表題の質問は意外に思われるかも知れない。動詞の～ing 形が、その機能によって動名詞と現在分詞の 2 種類に分けることができる、というのは理論的にもあり得るが、その現在分詞が、さらに 2 種類に分類されるというのは、話題になることはまずない。まず次の例文をみよう。

- (1)a Strolling about in the park, I thought of Mary.
- b While I was strolling about in the park, I thought of Mary.
- (2)a Not knowing what to say, I kept silent.⁽¹⁾
- b *Because I was not knowing what to say, I kept silent.

(1)、(2)は分詞構文の例である。(1a) については対応する (1b) が考えられるのに、(2a) に対応する (2b) はない。(2a) の know は状態をあらわす動詞であり、本来、進行形をつくれないう性質がある。それなのに、なぜ (2a) は可能なのであろうか。(2a) の knowing は進行形の～ing 形と関係ないのであろうか。

中島 (2001 : 544) は、「分詞構文に現れる現在分詞は、進行形の現在分詞とは異なる」とはっきりのべている。⁽²⁾つまり、「現在分詞には 2 種類ある」ということをいっている。

また、これと関係すると思われるつぎの例をみよう。

- (3)a The lady [coming down the corridor] is our English teacher.
- b The lady [who is coming down the corridor] is our English teacher.

(4)a We found a box [containing old documents].

b *We found a box which was containing old documents.

Imai et al. (2002: 146)

(3a) の coming~のような「分詞関係節」(participial relative clause)を含む文は、定動詞を含む関係節(finite relative clause)のある(3b)と同義であり、(3b) から who is を「消去」(いわゆる初期の変形文法での whiz deletion)することによって、(3a) を導きだすことができるとする考えがある。(ここから reduced relative clause (「縮約関係節」)とよばれることもある(Swan 2005: 494)。しかし、同様な形をしている(4a)には対応する(4b)がない。(4b)の動詞 contain は、(2b)の know 同様、状態を表わす動詞であり、本来進行形はつukれない、とする。

本稿では、以下の議論により、(1a)、(2a)、(3a)、(4a)にみられる~ing形は、進行形の~ing形とおなじ「現在分詞」であり、現在分詞に2種類あるとする考えは事実と反するということを主張する。

1. 以下で「現在分詞」に2種類はない、という議論にはいるが、まず確認しておかなくてはいけない点がある。

1.1 さきにあげた例文、

(3)a The lady coming down the corridor is our English teacher.

(3)b The lady who is coming down the corridor is our English teacher.

で、この二つの文は、本当に同義なのであろうか。(3a)の coming~も(3b)の who is coming~も、前の lady を修飾しており、機能的に同じであることはまちがいない。

ところが、Quirk et al. (1985: 947) は(5)の文に(?)をつけ、その許容性を

疑問視している。

- (5) ?Charles was longing to talk to the girl sitting in the corner and who had smiled at him.

ここでは、sitting～と、who had～の二つが girl を修飾しており、これらが and で等位接続されている。この文について Quirk et al. (1985) は

‘It is therefore quite usual for coordinate clauses to belong to the same semantic as well as functional category’

と述べている。「等位接続」される二つの要素は、「意味的にも、機能的にも同じ範疇」のものでなくてはならない、という条件があるとする。（同様の指摘は Schachter (1977: 90) にもみられる。⁽³⁾）

等位接続に関するこの条件が正しいとすると、(3a)、(3b)において、lady を修飾する coming～と who is coming～は lady を修飾するという機能においては同じであるから、意味に何らかの違いがある、ということになる。これは重要なことである。

あるとすればどんな違いがあるのであろうか。つぎにはこのことを考えることにする。

1.2 筆者は葛西 (2004) において、つぎのような議論をして、「進行形」(be Ving) における Ving の性格を明らかにした。

(6)a I saw John cross the road.

b I saw John crossing the road.

まず(6a)の cross では、道路をよこぎる「動作全体」を見るのに対して、(6b)

の crossing では、よこぎるという「動作の途中の一瞬」(Swan 1995: 284) を見ることを表わす。つぎに、

- (7)a *He caught a thief steal the money.
- b He caught a thief stealing the money.

このことを (7a)、(7b) によって確かめた。steal では、その steal の動作のはじめから、終わりまでの動作の全体を捕まえる、ということはありません。捕まえるのは、steal の動作のある一瞬であるはずである。また、

- (8)a *In this photograph you can see Joan blink.
 - b In this photograph you can see Joan blinking.
- (Kirsner and Thompson 1976)
- c John was writing a letter an hour ago and he's still at it.

動きのない、一瞬の「凍りついた動作」(frozen action) を写しとった「写真」には、はじめから終わりまで、という長さをもつ blink は不適切で、blink の一瞬を表わす blinking がふさわしい。(8c) では、was writing の部分が is at it と表現されていることは興味ぶかい。ここで、it とは、write という動作の一瞬であるはずである。以上のことから、葛西 (2004: 51) では、

“Ving’ は、V で表わされるものの「一瞬」を切りとった場面の表現である、’

と結論した。

1.3 前章では、Ving の性質を見た。この章では、Ving と、その意味上の主語との関係について、Jespersen の nexus を見る。

- (9)a the barking dog
- b the dog is barking

(9a) で barking は dog を修飾する修飾語であり、全体で名詞句をなしている。Jespersen は、この場合の barking を二次語、dog を一次語とし、この二次語と一次語の関係を junction と呼ぶ。また一方、(9b) の dog、barking は意味上の主語と述語の関係になっていて、一次語と二次語の関係が nexus である。Jespersen (1956: 59) は、この2種類の関係の性質をつぎのように述べている。

‘A junction is like a picture, a nexus is like a drama or a process.’

(9a) は「絵」のようであり、(9b) は「ドラマ」のようだという。ここで重要なのは、「絵」は時間の経過による変化はないが、「ドラマ」は時間とともに場面が変化するということである。Bolinger (1952) は、つぎの (10a)、(10b) について、

- (10)a The singing nun is popular.
- b The nun singing is popular.

つぎのようにいう。つまり、(10a) の singing は nun の前にあり、nun の「基本的な属性」(a basic attribute) を示しており、およそ「あの歌うたいの尼さん」という意味であり、singing が nun のあとにある (10b) では、nun の「一時的な状態」(momentary state) を示す。つまり、「(ある特定のときにたまたま) 歌っている尼さん」ということになる。前章で見た Vingこそ、まさしくこれである。

- (11)a The Sleeping Beauty (「眠り姫」)
- b a baby sleeping in a cradle

(11a) の sleeping は「姫」の基本的な属性を表わしており、あの (いつも) 「眠っている姫」であり、眠っていることが姫の属性となっている。一方、(11b) では、揺りかごのなかで「一時的」に寝ている赤子を示している。⁽⁴⁾ さきに見た (3a) はこれである。

- (3)a The lady coming down the corridor is our English teacher.
b The lady who is coming down the corridor is our English teacher.

ここで coming down the corridor は、ある時の、一時的な行動である。それでは、対応する (4b) がない (4a) はどうして許容されるのであろうか。

1.4 この質問には基本的な問題が含まれている。

- (4)a We found a box containing old documents.
b *We found a box which was containing old documents.

問題というのは、(4a) は (4b) をもとにして考えられている、ということである。このように考える、「(4b) が許容されないのに、なぜ (4a) は許容されるのか」という問題が生ずる。しかし、

‘Ving と進行形とは同じものではない。進行形は、be と Ving でつくられる’

のである。ところで、Ving は、さきに見たように、V の表わすものの一瞬を示している。したがって、(4a) は (4b) とはもともと意味的に平行の関係がないものなのである。(5) の文に (?) がついていたのはこのことが理由であるはずである。実は be Ving が「進行」を表わすのは、Ving ではなく、be の方であるといえる。‘be’ の意味は

‘used to say something about a person, thing or state, to show permanent or temporary quality, or state’

(*Cambridge International Dic. of English* 1995)

と定義されているように、ある特質、状態が「永久的ないし一時的」であることを言うのに使われるのである。つまり、be Ving が「進行」の意味をもつのは、Ving のもつ「一瞬」が永久的ないし一時的に存在する (be)、からである。(4b) が許容されないのは、contain されているものがつぎの瞬間に contain されていないということが考えにくいからであるはずである。また、(4a) が可能なのは、found したその時については contain していた、ということを示しているのであって、少しの問題もない。このように考えないとつぎの文は説明がつかない。

- (13)a The phone was answered by someone speaking with a Scottish accent.

(=who spoke with a Scottish accent)

Leech (1991: 233)

- b Anyone touching this wire will get a shock.

(=who touches this wire)

Swan (2005: 484)

つまり、ここで speaking~が who was speaking~から導かれるものとする
と、上のように who spoke~と=の関係にはないことになってしまい、=の関
係が説明できない。(13b) についても同様である。

初期の変形文法にもとづく中島 (文) (1980: 97) には、a dancing girl につ
いて、「踊っている女の子」を意味するときは、a girl who is dancing から導
くことができるが、職業的な「踊り子」を意味するときは、a girl who dances
(professionally) を基底に考えなければならない」としていることも参考になる

う。

1.5 つぎに分詞構文の例について見よう。ここでも基本的には上で見たのと同様である。

つまり、Ving と見ると進行形と関連させて考え、それを中心にして考えるのは間違いである、ということを念頭におかなければならない。進行形は Ving の使い方の一部にすぎない。

さきにあげた分詞構文の例 (1a)、(2a) で、strolling、knowing は対応すると考えられている、進行形をふくむ (1b)、(2b) の文から接続詞、主語、be 動詞を省略してできたものではない。

(1)a Strolling about in the park, I thought of Mary.

b While I was strolling about in the park, I thought of Mary.

(2)a Not knowing what to say, I kept silent.

b *Because I was not knowing what to say, I kept silent.

分詞構文の説明に、基本的には直接の関係をもたない「進行形」をからませるのは正当ではない。(1a)、(2a) の分詞構文にも、いわゆる「進行形」にも、たしかに Ving はでてくるが、「進行形」には、be Ving のように be があり、この be が「進行」の意味に大きな役割をするのはすでに見た通りであって、Ving に「進行」の意味があるわけではない。

さらにいえば、「状態」を表わすので進行形にならないとされる resemble は (13b) に見るように、進行形はできる。

(13)a *He is resembling his father.

b He is resembling his father more and more as the years go by.

(13a) は非文であるが、段階的な副詞をつけると (13b) のように許容される。

つまり、当の動詞の表わす動作・状態を全体としてみるのではなく、その動作・状態を一瞬・一瞬に注目して見るかによるのである。Swan (2005: 470)はこのことを、適格に

It (= a progressive form;引用者) shows how the speaker sees the event
---generally as ongoing or temporary, not as completed or permanent.

とのべている。この‘temporary’こそ Ving の役どころである。

以上で、分詞構文の Ving と、進行形の Ving は、別のものではなく、いずれも V で表わされる動作・状態の一コマをきりにとって、その一瞬をのべたもの、ということができる。

1.6 これまでのべてきたことは、そのまま「独立分詞構文」(absolute participial construction) にもあてはまることは、つぎの例でわかる。

- (14) The bus drivers being on strike, many people had to get to work using other means of transportation.

ここでは、bus drivers が on strike の状態にある、その一コマを切りとって being と示しているにすぎない。この部分が、この文全体のなかで、どんな機能を果たすのか、どんな時を表わすのかは、もっぱら「主節」との関係できまる。being そのものは「時制」を示しえない。(14)では、drivers が on strike しているのが「過去」だということは、「主節」の had to get の時制できまる。このことは、つぎの

- (15) A tile falling from a roof shattered into fragments as his feet.

の falling について、fall したのは、shattered とおなじ「過去」であったはずである。このことについて安井 (1987: 370) は「分詞による後位修飾が表わす意味は、時間的にみて、主節と同時間あるいは連続的でなければならない」という。「同時間」については、つぎの

(16) I heard him giving orders.

は、he が orders を give している一コマを耳にした、ということであるが、その give は、heard と「同時」でなくてはならないことでもはっきりしている。ここで、この「一コマ」、「同時」について、つぎのことにふれておく。

1.7 われわれは以上の議論で、(6b) I saw John crossing the road. の John crossing the road は、John が、the road を cross している、その一コマをきりとったもの、だということを見た。

1.8 さて、日本語の「風景」と「光景」のちがいについて、国広 (1998: 19) は、「風景」を〈構図的なまとまりを加えてとらえたもの〉としたのに対して、「光景」に

‘時間のながれの中で一齣（こま：引用者）をとらえたもの。構図よりも動きの知が中心である’

という定義を与えている。「時間のながれの中で一コマをとらえた」という箇所は、われわれが Ving の性質を述べたものと同じである。

(17) the landscape of rural Belgium unfolding before me

(甲斐 2005: 88)

(17)の例は landscape の「光景」の定義に相応しい例であり、「一齣」をきりとった「光景」には、「一瞬」をあらわす Ving がふさわしい。さきにあげた、

(7b) In this photograph you can see Joan blinking.

において、this photograph は Joan が blink している一コマ、つまり Joan blinking を撮ったもののはずである。これこそつぎの(18)である。

(18) this photograph of Joan blinking

とすると、photograph は視覚的なものであるが、べつの感覚器官についてもありうるはずである。つぎの例がそれにあたるものであろう。

- (19a) the smell of the onions being cut up
- b the feel of sweat running down her back
- c the sound of the wave splashing
- d the sight of dogs mating

(Declerck 1991: 461)

甲斐 (2005) には、これに類する例があげられている。

2. いままで議論してきたことに関連して考えておくべき重要なことが残っている。(11b) に関わる。

(11b) the baby sleeping in a cradle

この表現で、われわれは、in a cradle で sleep している、その一瞬をとらえた表現とした。つまり、日本語では(その時、一時的に)「揺りかご

で寝ているその赤子」とい「もの」の意味に解釈した。しかし、この (11b) は、次の文

(20) I found the baby sleeping in a cradle.

では、「その赤子が揺りかごで寝ているの（「こと」）に気がついた」となる。つまり、おなじ the baby sleeping in a cradle が、「～している赤子」、「赤子が～している」のように、「赤子（という「もの」）とも、「赤子が～している」という「こと」がら、のようにも解釈できる。

日本語では、「もの」と「こと」は大野（1978）にあるようにはっきり区別がある。

‘<コト> が時間の経過とともに進行する行為をいうのが原義であるに
対して、<モノ> は推移変動の観念を含まない’

という。⁽⁵⁾しかし、英語では、つぎに見るように、この区別ははっきりしないようである。Quirk et al. (1985) はつぎのように述べている。

(21)a I noticed a man hidden behind the bushes.

b I noticed a man who was hidden behind the bushes.

c I noticed that a man was hidden behind the bushes.

Quirk et al. (1985: 1269) は、(21a、b、c) は、おなじ場面を表現しており、これら三つの文は「ほとんど、ないしは、まったく意味の違いはない」という。しかし、日本語では、気がついたのは、(21b)では、(隠れていた人)という「もの」であり、(21c)では、「人が隠れていた」という「こと」である。（日本語では、明らかなこの区別が Chomsky 自身もできなかったと Aspects (1965) のなかでのべている）。⁽⁶⁾

表題の問題、つまり、現在分詞の問題を扱いにくくしているのには、英語話者の「こと」、「もの」を明確に区別しないらしい認識の違いが絡んでいるように思える。

3. まとめ

(2)a Not knowing what to say, I kept silent.

(4)a We found a box containing old documents.

(2a)、(4a)の know、contain は、状態動詞であり、「進行形」はつくれない動詞であるが、(2a)、(4a)が許容されているところから、(2a)、(4a)の knowing、containing などは、「進行形」の「現在分詞」とはちがう、とする考えかたがある。

しかし、これは Ving、be Ving（進行形）を誤解していることから始まるものである。Ving は、Vの表わす動作、状態の一瞬、一こまをきりとったものであり、be Ving は、Ving が be（存在）することを示している。「進行形」とは、その一こま、一こまが(上で見たように)‘permanent’であれ、‘temporary’にであれ存在する、ことを表わす。言い方をかえれば、

‘進行形’は、be と「現在分詞」からできているが、「現在分詞」そのものではない’

さらに言えば、「動作動詞は進行形になるが、状態動詞は進行形にならない」というのも正確ではない。状態というものは、一瞬、一こまごとに変わるのが動作の場合よりも少ないので、進行形になじみにくいというだけのことである。

「現在分詞に2種類ある」とするのは、Ving の性質を誤解し、しかも Ving と be Ving を同一視してしまっていることに原因がある。

最後に、この問題は、日本語の「こと」、「もの」にも関わっており、英語では、この二つを厳密に区別する思考法をもたない可能性があることにもふれた。

注

- (1) Bolinger (1946: 74) にもつぎのような例がある。

(i)a Knowing they detested John, I didn't invite him to the party.

b* I know them to detest John.

- (2) ここでは Stump (1985) にもとづくとして、三種類の根拠をあげているが、本論文の主張つまり、Ving と進行形とは同一ではない、という考えからするとかならずしも納得できるものではない。

- (3) Schachter (1977: 90) にはつぎの「等位要素制約」がある。

The coordinate constituents constraint: The constituents of a coordinate construction must belong to the same syntactic category and have the same semantic function.

- (4) 安藤 (2005: 483) には、つぎのような例と訳・説明がある。

(ii)a A nightingale is a singing bird. (=a bird that sings)

(ナイチンゲールは歌鳥だ) [恒常的な特徴]

b The people singing (=who were singing) were students.

(歌っている人たちは学生だった) [一時的な状態]

- (5) この大野の「こと」、「もの」の定義をみると、すでに見た Jespersen の nexus (時間とともに変化する drama、process)、junction (時間とともに変化するもののない picture) と奇妙なほどの平行性がある。

- (6) Chomsky (1965: 22) はつぎの (iiia、b) の例で説明しているが、結局はおなじことである。

(iii)a I persuaded John to leave.

b I expected John to leave.

つまり、(iiia) で、persuade の目的語になっているのは John という人「も

の」であり、(iiib) で expect の目的語の機能をはたしているのは John to leave という「こと」である。

「こと」、「もの」の区別が曖昧なことは次のような例にも見られる。

(vi) a Flies are impossible in this climate.

b The existence of flies is impossible in this climate.

Vendler (1967: 159)

Vendler は、ものの「存在」(presence or existence)を表わすときは、(vib) より (via) が使われるという。(vib) の主語は、「存在すること」であり、(via) の主語は、「ハエというもの」である。また、

(v) a Just a few looks better.

b The fact of having just a few looks better.

Schibsbye, K. (1970: 39)

ここでも、looks の主語は、(vb) では、「こと」であり、(va) では「もの」である。

なお、Radford (1978: 35) にはつぎのような例がある。これを見ると、英語よりも仏語のほうが、「こと」、「もの」の区別について、さらに曖昧なようである。

(iv) J'ai vu Marie qui pleurait.

I saw Marie (lit.: 'who was') crying.

参考文献

安藤貞雄 2005 『現代英文法講義』 開拓社

Bolinger, D. 1946 'Concept and percept' *World Papers in Phonetics: Festschrift for Dr. Onishi*

Bolinger, D. 1952 'Linear modification' *Publications of Modern Language Association of America* 7: 117-44

Declerck, R. 1991 *A Comprehensive Descriptive Grammar of English* Kaitaku-

sha

- Imai, K., Nakajima, H., Tonoike, S. and C. D. Tencredi 2002 *Essentials of Modern English Grammar* Kenkyusha
- Jespersen, O. 1956 *Essentials of English Grammar* George Allen and Unwin
- 甲斐雅之 2005 「知覚名詞類について」 田中・神埼 (編) 『英語語法文法研究の新展開』 英宝社
- 葛西清蔵 2004 「'(be) Ving の意味と特質」 『英語学点描』 共同文化社
- Kirsner, R. S. and S. A. Thompson 1976 'The role of pragmatic inference in semantics' *Glossa* 10: 200-240
- 国広哲弥 1998 『理想の国語辞典』 大修館書店
- Leech, G. 1991 *An A - Z of English Grammar and Usage* Longman
- 中島文雄 1980 『英語の構造』 (上) 岩波書店
- 中島平三 (編) 2001 『英語構文事典』 大修館書
- 大野 晋 1978 『岩波古語辞典』 岩波書店
- Radford, A. 1975 'Pseudo-relatives and the unity of subject raising' *Archivum Linguisticum* 6: 32-64
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. and J. Svartvik. 1985 *A Comprehensive Grammar of the English Language* Longman
- Schachter, P. 1977 'Constraints on coordination' *Lg.* 53-1: 86-103
- Schibsbye, K. 1970 *A Modern English Grammar* Oxford Univ. Press
- Stump, G. T. 1985 *The Semantic Variability of Absolute Constructions* Reidel
- Swan, M. 1995 *Practical English Usage* (2nd edition) Oxford Univ. Press
- Swan, M. 2005 *Practical English Usage* (3rd edition) Oxford Univ. Press
- Vendler, Z. 1967 *Linguistics in Philosophy* Cornell Univ. Press
- 安井 稔 (編) 1987 『現代英文法事典』 大修館書店